

# 私は何人でしよう？

## ～「ハーフ」から考える異文化との出会い

木村 護郎 クリストフ（上智大学外国語学部講師）

「木村護郎クリストフ」という名前からは、この名称の主が「何人」であるか、はっきりしないところがあるようだ。この拙稿を読んでくださっている方はこの「何人」をどのように読まれたらうか。私の名前について最近経験した二つの例を手がかりにして、異文化との出会いについて考えてみたい。

私が非常勤講師として出講している某大学では、授業の前に事務室に寄って、出勤簿に印鑑を押すことになっている。ところが、先学期はじめに「非常勤講師」という表紙のついた出勤簿をめくったら、自分の名前が記された台紙がない。事務の方で入れ忘れてしまったのかと思って、担当の人に「私の台紙がないんですけど。」ときいたところ、「ああ、クリストフ先生はこちらになります。」と、別の出勤簿を出してきた。はじめて話す人にいきなり「クリストフ先生」というのもどうかと思ったが、その出勤簿をみて驚いた。表紙に「外国人講師」と書いてあったのだ。さすがは旧帝国大学、「お雇い外人」は別枠なんだ、とちょっと歴史を感じてしまった。今も（しかも名前で！）区別しているとは。「非常勤講師」と「外国人講師」という、対応しないカテゴリーによる、「国民」と「非国民」(?)の区別のカムフラージュもさすがである。露骨に「日本人講師」と「外国人講師」とを対比するなら明らかに抵抗感を呼び起こすだろう。

しかしここでこのエピソードをとりあげるのは、区別がなされていること自体ではなく、別の理由からである。というのは、その前年度、私の名前は「非常勤講師」の出勤簿にあったのだ。去年は「日本人」だったのが今年は「外国人」になってしまったのである。おそらく、異なる担当者が、私が「何人」（なにじん）であるかについて異なる解釈をしたのであろう。

たまには「外国人」になってみるのも悪くないと思い、出勤簿はそのままにしておいた。ただ、好奇心から、なんで外国人は別の出勤簿なのかときいたところ、「うーん、わかりやすいためですね。「a」と「あ」と

のちがいとありますし。」との答えだった。なるほど、外国人講師の出勤簿はアルファベット順なのかと思って自分の名前を探したが、なにか順番がおかしい。どういう配列なのかと改めて考えてみたら、アイウエオ順だった。それはそれで立派な見識だが、これでは「非常勤講師」の出勤簿と同じである。じゃあ、なんで区別するんだろう。どうせ別扱いにするなら、かつての「お雇い外人」並みの高給にしてほしかったな。（念のため、給与明細を確かめたら、前年度と同じだった。）

名前に関わるもう一つの出来事は、ある雑誌にほかの2人（日本人）とともに共著論文を投稿したときのことである。編集部から電話がかかってくる。「この論文の著者は何人ですか。」と聞かれた。「何人」は今度は「なんにん」である。3人の日本人のほかにもう一人「クリストフ」という人がいるのかと思ったらしい。冗談のような話だが、学会などの名簿にも、私が「護郎クリストフ」と一続きで名前を書いているにもかかわらず、「護郎 クリストフ」と切り離して書かれることがある。そうすると、行も繰り下がって、別人のようにみえる。このような場合、この名前が「何人」（なんにん）であるか、確かに紛らわしい。実際、「木村護郎様 クリストフ様」と書かれたダイレクトメールが送られてきたこともある。

これらの例でみられた「なにじん」と「なんにん」という2つの問いは、単にたまたま同じ漢字（「何人」）であるだけではなく、密接につながっているのではないだろうか。つまり、どちらも自分の名前の由来と関連するのである。ちょっと「国際的な」（西洋人と接触のある）人がよく勘違いするのだが、私の場合、クリストフというのは「ミドルネーム」ではない。護郎は日本人の父がつけた名前であり、クリストフはドイツ人の母がつけた名前である。父はドイツの名前に詳しくないし、母は日本の名前に詳しくない。それで、一人一つずつつけてくっつけたという単純な話であ

る。いわば父母それぞれの母語による名前を並べたものだから、なにじんかわからないし、なんにんかわからない、ということになる。

こういう、私のような人を、世間では「ハーフ」あるいは「ダブル」と呼ぶ。ところがこのような、「国際結婚」の子どもを特別視する言い方が長い間、しっくりこなかった。自分は半分でも2倍でもなく、ふつうの一人の人間だと思ったからだ。自分から「ハーフ」ないし「ダブル」として自己紹介したことは一度もない。

このような「ハーフ」や「ダブル」への違和感が少しほぐれたのは、私の好きなドイツ語作家アダルベルト・シュティフター(1805-68)の短編小説『水晶』(1853年出版)を読んでからである。これは、山中の谷間にあるクシャイトという僻村に住む二人の幼い兄妹が雪山で遭難して帰還するまでの体験を描いた作品であるが、私は村におけるこの二人の位置づけとその変化に注意をひきつけられた。この兄妹の母親は、一山こえた別の谷から嫁いでくるのだが、村の住民からはよそもの(「外人」とみなされる。徒歩わずか3時間の距離なのだが、山の向こうとは言葉や気風も異なるのである。そしてその二人の子どもも、半ばよその子(まさに「ハーフ」!)とみなされるのである。しかし、子どもたちが村人の総出の捜索によって雪山から救助されたあと、話の末部では次のように語られる。

「子どもたちはこの日を踏み出しとして、はじめてほんとうにこの村の子になった。このときからもうよそものではなく、村で生れ、村人が山からつれおろしてきた子どもとみなされるようになった。」(手

塚富雄・藤村宏訳『水晶』岩波文庫89ページ)

こうして、この作品は、「ハーフ」が地元民の一員として受け入れられる物語としても読むことができる。高校のとき、この小説を読んではっと気づいたのは、人々の生活世界にとって、「ハーフ」というのは国単位とは限らない、ということである。異なる文化をもつ父母から生まれる子どもたちは「ハーフ」なのである。

この線で考えすすめていくと、ミジンコなどの単為生殖ならともかく、人間は、出生地も人生経路も異なる父親と母親から生まれる以上、みな「ハーフ」(ないし「ダブル」といえることになる。人はだれでも、基本的に異文化交流の産物なのである。

『水晶』は、国家の論理にとりこまれる前の生活世界を描いているが、国民国家の成立によってさまざまな文化的な違いは国単位に収斂させて理解されるようになった。そのようななかで、今日の日本で使われるような意味での「ハーフ」がうまれたと考えられる。しかし、このような「ハーフ」観は、あたかも国単位で均質な文化があるかのような錯覚を支える効果をもつ。逆にいうと、「ハーフ」をこのような狭い観点から解き放つことは、「異文化＝国際」という単純な等値に疑問を投げかけ、さらには異文化を自分の外にばかり見出すのではなく、身近なところからとらえなおすひとつのきっかけになるのではないだろうか。今度、私の名前をみた人に、「ハーフですか。」と聞かれたら、「もちろん。あなたは違うんですか。」と答えようかな。